

初めて彼氏が出来たのは、女子校生の時でした。そして、初めてセックスをしたのも。

初めて、浮気セックスをしたのも…。

※※※

「それでね、その時のミランダ様のカッコよさったらありやしないわけよ！」

「うんうん！わかるわ！超カッコよかったわよね！でもミランダ様を影で支えるオズワルド様も最高じゃない？」

「きゃー！そうそう！やっぱり園子わかってるう！私が言いたいのには実はそっちなのよ！」  
「……………」

クラスメイト達がいなくなった放課後の教

室。私は自分の席に着いたまま、二人の友達、貴子と園子の話に静かに耳を傾けていました。

「ひなたは？ひなたはわかってるの？あの一連の流れの中でのオズワルド様の尊き輝き！」

「え：：ご：：ごめん：：その漫画：：最近読めてなくて：：：ごめん：：」

私は二人を失望させないように、申し訳なさを全面に出して謝罪しました。先程から、二人は二枚目のキャラクターが多数登場する少女漫画の話で盛り上がっていて、このところ連載を追えていない私は、邪魔にならないように黙って聞いていたのです。

貴子が、私を責めるように言います。

「え〜そうなの〜なんで読んでないのよ〜あんなに面白いのに〜：：あ、やっぱ彼氏が出来ると漫画なんて読んでる暇なんてないのか」

「そ、そんなこと：：」

「やっぱひなたは私達とは違うよね〜。私はキ

モくて地味な眼鏡のオタク女だし。園子も地味なおデブちゃんだし。いいなくひなたは可愛くて。やっぱ彼氏が出来ると、出来なくて少女漫画のイケメンキャラに夢中になってる子の間には画然たる差があるのね…」

「こらこら、貴子。ひなたをあんまりいじめるんじゃないわよ。…っていうかなにさりげなく私のことデブとか言ってるのよ！」

「いやデブじゃん！どっからどう見てもデブだし！園子みたいなデブ女には一生彼氏なんて出来ないわね」

「あんたに言われたくないわよ！貴子、あんたって自分で思ってるよりずっとキモいわよ？絶対あんたよりは先に彼氏出来るから」

「いやいやありえないって。デブ女と付き合いたい男なんているわけないし」

「……………」

私は、いたたまれない思いで二人の口論を聞

いていました。この言い合いは、気の置けない親友同士の、単なるじゃれ合いに過ぎないと経験上わかっているのですが、二人の冷たい自虐がひしひしと伝わってきて、なんだか悲しくなってきたのです。

確かに貴子はクセの強いオタクだし、園子はちよつとだけぽっちゃりしていますが、私は彼女達の良いところをいっぱい知っています。

だから二人の言葉を遮って言いました。

「出来るよ！」

「…え？」

「？」

「貴子にも園子にも、絶対彼氏出来る！すぐ出来るって！こんな私にだって出来たんだもん！だから大丈夫だよ！」

「……………」

「……………」

いきなり大声を出したからか、二人は私を見

て揃って目を丸くしました。そして。

「あは！」

「はははっ！」

同時に、吹き出したのでした。

「ふふ！やっぱひなたは可愛いなあ。天使だな  
：うん、なんかわかった気がする。なんでひな  
たに彼氏が出来て私達には出来ないのか。貴子、  
お互い性格直さにやらんね」

「はは：そうだね」

「もう、私、冗談で言ったわけじゃないのに：」

「ふふ、わかってる。わかってるって。：あ！」

その時、いきなり園子が大きな声をあげまし  
た。

「ひなた。王子様が迎えに来たみたいよ」

彼女が指し示す教室のドアのところ目を見  
向けます。そこには、モジモジした様子で一人  
の男子が立っていました。

私の：彼氏でした。

「ほら、待たせちゃ悪いわよ。早く行ってあげな」

「うん…ごめんね、二人とも…今日はありがとう」

実は、この後彼氏と約束があつたのですが、彼は先生から用事を頼まれて、待っている間、二人は私の相手をしてくれていたのです。こちらからお願いしたわけでもないのに。

「いいって、いいって。じゃあまた明日ね」

「またね、ひなた」

「ありがとう。貴子、園子」

私は二人の親友に心から感謝して、彼の元へ向かいました。



「うくん：わかんない：難しいよ…」

目の前に座る、彼氏の螢(けい)くんが、駄々をこねるみたいに言います。眼鏡をかけた、真面目で大人しい男子の螢くんですが、私と二人きりの時はこんな風に甘えてみせたり、冗談を言ったりを頻繁にします。クラスメイトの前では、そんな顔絶対見せないのに。私は螢くんのそんな可愛いところが大好きでした。

「こらこら。すぐわかんない、ってなるんじゃないよ。問題をもう一回ちゃんと読もう？ほら、そんなに難しいことってないよ。ちゃんと習ったことから応用出来るはずだから。ね、頑張っつて、螢くん」

誰もいない空き教室で、私達は二人で勉強していたのでした。この学校は、生徒の自主学習のために、放課後の空き教室を開放してくれます。それを利用して、このところ私達はよく居残り勉強会をしていたのです。

受験はまだ少し先ですが、同じ大学に通うために、二人で話し合って始めたことでした。螢くんには申し訳ないのですが、私の学力と彼のそれとは少し差があるのです。勿論、私の方が上です(螢くんごめんね…)。

「うゝ…わかった…」

「はい。頑張ってたね、螢くん」

だから勉強会とはいうものの、殆ど私が彼に教える形になるのです。

「うゝ…うゝ…」

唸りをあげながら数学の問題と格闘する可愛い螢くんの顔を、私はじつと見つめます。派手さも飾り気もない彼ですが、目鼻立ちは比較的整っていて、やっぱりすごくカッコいいです。螢くん…大好き♪

「……………」

ふと、何故彼は私のことを好きになってくれたのだろうか、そんな気持ちが沸き立ちました。

貴子と園子は、ひなたなら当然という風に言ってくれますが、私は実は不思議なのです。何故私なんかに彼氏が出来たのか。

私は、すごくダサくてイケてない女の子だと思います。髪は二つ結びの三つ編みで、昔の女学生って感じでなんか古いし。顔も決して美人とはいえないと思います(でも螢くんはひなたの顔は素朴で可愛いって言ってくれます。ありがとう螢くん。大好き♪)。背も低いし、スタイルだって良くありません。

「……………」

そして、貴子も園子も、螢くんも…クラスメイト達も、先生も家族も…。私のそんな地味な外見と地味な性格と学業の成績から、虫も殺さない清純な女の子という記号的イメージで私を定義して、過大評価しているような気がするのです。勉強が出来て、優しく、大人しくて、真面目で、今風じゃなくて、ちよっぴり天然で

…。それが全て間違っているとはいいいません。  
でも、私は…。

「……………」

私は、そんなに良い子ではないと思うのです  
…。

「うゝ…………ん！出来た！どうですか！先生？」  
暫し意識を飛ばしていた私は、螢くんの声に  
ハツとします。慌てて真面目な先生に戻り、彼  
の答案をチェックします。

「…………ん！オツケー！完璧よ、螢くん」

「マジ？よっしゃ！じゃあご褒美いただきま  
あゝす♪」

「へ？…………んっ！」

突然奇異なことを言い出す螢くん。と思っ  
たら、彼は立ち上がり、向かいに座る私の元まで  
回ってきて…………いきなり唇を重ねてきたので  
す。

「きゃっ！んんん！」

「ぶちゆうう！んん！ああ！ひなた！ひなた！」

彼は激しく私の口を襲います。

「んんっ！や：んん！」

「ああ！ずつちゆうううう！はあ、勉強なんてやっつけられっかよ！ひなた！ああ！可愛い！ひなた！」

「はあ！んん：ダメ！ん：ちゆ：ダメよ、螢くん：ここ学校：んんちゆ：学校でこういうことしちゃ：ああ：ダメ：」

強引に舌を入れてくる野性的な彼氏に、女の子としての嗜みといいますか、私は当然拒む姿勢を見せます。でも、内心では…。

（ああん♪螢くん：はあ：好き：大好き：もつと：ああ：もつとちゆうして：ひなたにちゆう：ちゆうして：いっぱいちゆうちゆうして：ああ：好き：好き：大好きな螢くん：♪  
ああん♪もつと♪♪♪）

メロメロになって、大好きな彼氏に舌をベロベロ舐められることを、強く懇願していたのでした。しかも、それだけではなく…。

（ああ…すご…螢くんのベロチュー激しい…  
んん…普段クラスでは大人しくせに…真面目な眼鏡キャラのくせに…なに？この獣みたいな荒々しいベロチュー♪…ああ…いい…いいわ…♪…最高…素敵よ、螢くん…はあ…ベロチュー好き…大好き…すごい気持ちいい…  
…ああ…美味しい…螢くんの舌…男の味…濃くて…ねっとりした…男の味…これ好き…ひなた…この味大好き…男の味…男味…ああ…  
…螢…螢…螢…好きよ…大好きよ…）

三つ編みおさげの優等生の私は、そんなはしたないことまで、心中で堂々と叫んでいたのでした…。

「べろべろべろべろ！ああ！ひなた！ひなた！んん！れろれろれろ！」

「んん！やん…だめ…ああ…れる…んん…ち  
ゆる…」

学校でこんなことをしてはいけない。その言葉に嘘はありません。でも正直、私は自分がこの後どうなってしまうのか、全く自信がありませんでした。

と、その時。

「わああああ！！！」

いきなり、大声がしました。私の声でも螢くんの声でもありません。声がした方向を見ます。教室のドアのところ。女子が立っていました。二人いるようでしたが、はっきり確認出来たのは一人だけ。セミロングの髪を派手な茶色に染め、制服のスカートを短く変形させて太腿を剥き出しにした、いわゆる、ギャルと呼ばれる女子生徒でした。

実は、私のよく知っている人でした…。

「やば！逃げよ逃げよ！」

慌てた様子で、彼女ともう一人は去っていき  
ました。空き教室のドアを開けたら、カップル  
が激しいキスをしていたから、思わず悲鳴をあ  
げてしまった。そんなところでしよう…。

「…：ひなた、帰ろうか」

「うん：わかりました」

私達もなんだか居づらくなり、今日の勉強会  
は終わりました。

※※※

「ああ！ひなた！ひなた！ああ可愛い！可愛  
いよひなた！」

「はあ！ああ！んんんっ！ダメ！やん！だめ  
えええん！！！」

勉強会終了から三十分後。私達は、セックス

をしていました。

学校を出て、私達は一番近くのラブホテルに直行しました。螢くんは体の火照りが収まらな  
いと言つて、私をラブホに連れ込みました。勿  
論頬を赤くして拒む素振りをしましたが、私も  
気持ちは同じでした。

優等生の私は、制服のまま、三つ編みおさげ  
髪のまま…。

彼氏のオチンチンを、オマンコに突っ込みま  
した…。

※※※

(ああ…セックス…気持ち良かった…)

学生として殊勝な自主勉強会からその直後  
のラブホセックスを終え、彼氏と別れて帰り道

を一人歩く私は、そんな下校中の女子校生にあるまじき言葉を脳内で唱えていました。

同じクラスの螢くんに告白されて付き合い始めて数カ月…。真面目系同士の私達カップルは、普通にセックスをしていました。私をただの大人しい地味女と確信している先生や親や貴子や園子が知ったらひっくり返るでしょうが、素朴な三つ編みの目立たない女の子は、ちやつかりやることはやっていたのでした…。

とはいえ、私はそんな彼氏との蜜月の日々に心身ともにトロトロにとろけていたのかというのと、実はそうでもないのです。

「……………」

なにかが、違う…。

なにかが、足りないのです…。

最初は痛いだけだった彼とのセックスは、随分気持ち良くなってきました。でも、私は満たされないのです。年頃の全ての女子校生がそ

うであるように、私もセックスに対して多大な憧れを抱いていました。どんなに気持ち良いことなんだろう、と（とかくピュアな恋愛脳と思われがちな女子校生ですが、案外単純な男性的性欲でもってまだ見ぬセックスに思いを馳せていたりするのです…）。確かに、気持ち良かったです。私の中の愚かな性欲は、十二分に充足されたはずです。

でも…。

（…こんなはずじゃない）

理想と現実とは違う。現実には案外無味乾燥で殺風景…。ただそれだけのことなのかもしれないが、私は確かに、そんな失望と共に日々を過ごしていたのでした。

大好きな彼氏がいるのに…。

セックスもいっぱいしてるのに…。

「…：…ひなた」

帰り道を歩きつつ、ややメランコリックなモ

ードになってきた私は、突然背後から声をかけられました。知っている人でした。さつきも空き教室で見た：ギヤル。

「：小百合」

幼馴染の、小百合でした。彼女とは家が近くて昔からよく知っているのですが、最近はクラスが別々なこともあって、以前のような友達付き合いはなくなっていました。

小百合は今の学校に進学してから急に派手な見た目になり、私はいわゆる優等生だったので、お互いに気を遣って距離を取っていた部分もあつたのかもしれない。

こうして小百合と話すのは久しぶりなので、私はどうすればいいのかわからず、固まってしまいました。

「ひなた：久しぶり。：彼氏出来たんだね」

「ねえ：マジやめところよ、小百合。ヤバいつて」

ギャルになった幼馴染の隣に、もう一人女の子がいました。私の知らない子で、こちらはギャルといった感じではなく、でも真面目なタイプにも見えず、短い黒髪でどこかやんちゃっぽくロックバンドとかが好きそうな、やっぱりそれなりに遊んでそうな子でした。空き教室の時にも小百合と一緒にいた子だと思われます。

彼女は小声でなにやら小百合を制止していましたが、小百合は構わず私に語りかけます。「真面目そうに見えて……ちゃんとやることやってんだね、あは♪」

彼女はさつき目撃した私達のデーパーキスのことを言っているのです。私が優等生ということで、学校でのそんな不純な行為に対して、なにか脅されたりするのかもしれない。彼女は幼馴染ですが、私は警戒を強めました。

「しかもさ……その後……ラブホ行ったでしょ？見ちやっただよね♪」

「！！！」

私は瞬間的に背筋が冷たくなるのを感じました。あの後、つけられていたのでしょうか…。

「いや〜ひなたって勉強大好きな真面目優等生ちゃんに見えて、しつかりエッチとかしちやってるんだね♪あはは♪ああ、心配しないで。別に先生や親に告げ口したり、脅したりするつもりなんてないから。ホントホント、そういうんじゃないんだよマジで」

小百合は急に慌てた様子で弁解します。

「……………」

「ただちよつとね…私らの話を聞いてほしいんだよ。…お願い！実は困ってんのよウチら！もうひなたしか頼るアテがなくなつて！お願い！お願い！マジお願いします！幼馴染のよしみで話だけでも聞いてくんない？」

一転して手を合わせて頭を下げる幼馴染に私は困惑しましたが、その様子に嘘はなさそう

な感じでした。どうやら、本当に脅迫されたりすることは無いようです。

「別に…いいよ。話くらいなら…聞くよ?」

私はそう答えていました。

「ホント?聞いてくれるの?マジありがとうひなた!ひなたちゃん最高!ひなたマジ天使!じゃあ、ちよつと込み入った話になるからさ、そこの喫茶店で、いい?」

「…うん…わかった」

元は気心の知れた幼馴染です。彼女が本当に困っているらしいのも相俟って、私は完全に警戒を解いていました。事情はまだわからないものの、素直に小百合を助けてあげたいという気持ちになっていたのです。

私達は三人で近くの喫茶店に入りました。私は小百合と向かい合う形で座ります。小百合の友達の彼女は、小百合の隣に腰を下ろし、依然なにか不本意そうな、乗り気ではない感じの表

情をしていました。

三人分の注文した飲み物が来てから、小百合は話し出しました。

「それでね：ひなた：話なんだけど：」

「うん」

「ひなたって：彼氏：いるわけだよね？」

「うん：そうだよ」

奥歯にももの挟まったような物言いに少しもどかしく思いながらも、私は幼馴染の言葉を待ちます。

「：ひなた。：：：単刀直入に言うね」

意を決した顔になって、小百合は言いました。

「：彼氏以外の男と：：：エッチしてみない？」

「：：：：え」

昔から知っている幼馴染は、瞬時には理解不能な言葉を口にしたのでした。

そして、この言葉を聞いた時、私のその後の人生が決定づけられたように思います。

欲と裏切りに満ち、醜悪で低俗で、これ以上ないほどに下劣な……最高の、人生が。